

府障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7 11
府教育会館704号
(TEL)6765-8904
(FAX)6765-8905

2016年度 青年部総会

6月17日、今年度の青年部総会を行い、15分會31人が参加しました。学習会、議案書提案と討論、交流会という内容で、私たちの権利について学び、教育をめぐる情勢や青年部としての方針を確認しました。また、参加者それぞれが職場の様子や、自分自身の悩みを出し合い、交流を深めることができました。

仲間と語り合い、ほっと一息



グループ交流の様子

今年度の学習会は「大阪市立特別支援学校が府立学校に〜どうして?どうなった?」というテーマで、府移管が強いられるまでの経過や、撤回を求める「大阪の障害児教育をよくする会」や障害者団体との共同のとりくみ等について、戸田委員長の報告を聞きました。

次に青年部常任委員より、議案書に基づいて、昨年度の主なとりくみの報告、教育をめぐる状況、働く環境、平和への願い、運動方針、会計報告が提案され、参加者それぞれの内容を確認しました。当日、参加できなかった分會へも、後日、議案書を届けますのでぜひ目を通してください。

議案書の提案に続いて、グループ交流を行いました。今年度は障害種別の小グループに分かれ、「仕事の悩み、どうしていますか?」というテーマで自己紹介を兼ねながらざっくばらんに語り合いました。その中には、障害種別ならではの悩みや、青年ならではの悩みなどが交流され、大いに盛り上がりました。



大きな笑い声も

参加者は、今年の初任者をはじめ、経験年数を重ねて若手の育成を求められている立場にある人や、分掌で大きな仕事を任されている人など様々で、先輩教員は初任の方などにどう伝えていけば良いかなど、の話題でも盛り上がりました。話し始めると時間はあっという間で、もっと話をしたかった」という声もありました。



悩みなどを交流しました

最後に議案書の採決と、新役員への紹介を行って総会は閉会しました。引き続き、場所を変えての交流にも多数の参加があり、総会で話しきれなかったことを話題に盛り上がりました。最近では青年の多忙化により、定期的にはなかなか会議に出席できない組合員が増えています。府障教青年部では、各職場の実情にも合わせながら青年が仲間と出会い、語り合える場を少しでも多く持てるよう、みなさんの声をもとに今年度もとりくみを企画していきたいと思えます。毎月の青年部委員へにも、ぜひ足を運んでください。

参加者の感想です!

困っていること、最近の状況について共有できたので良い機会だった。この場で聞いたことを、今後に活かしてみたい。
初任の先生方も多くて、色々な悩みが聞けてよかったです。
交流でたくさんのお話を聞くことができ、他校の話がきけてよかったです。深い話、相談がしたいなと思えました。
いろいろと学習できて、とてもよかったです。しゃべるのは苦手ですが、青年部員の方がたくさんいるところに来ると「一人じゃないな〜」と安心できます。
同じ障害種校の方とお話でき、共通の悩み、そうでない悩み等色々聞くことができました。初めての参加でしたが、温かい雰囲気でした。落ち着いた感じが、温かい雰囲気でした。

府障教ホームページアドレス <http://www1a.biglobe.ne.jp/fushou/>

Eメール アドレス : fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp



欧州連合(EU)離脱の是非を問うイギリスの国民投票で、離脱支持が51.9%で過半数を獲得し、世界に衝撃を与えています。与党・保守党のキャメロン首相は、「わが国の歴史で最大の民主主義の行使の一つがあった。結果は私の望むものではなかったが、結果に疑問はあり得ない」と演説して辞任を表明しました。野党の労働党でも、残留運動に不熱心だったとコービン党首の責任を追及する動きが強まっています。
イギリスでは2010年以降、ギリシアの財政問題に端を発した一連の経済危機への対応として、増税や社会保障削減などの緊縮政策がすすめられました。一方で、企業の競争力強化策として低賃金政策を進めたため、失業や貧困が拡大して、離脱支持票が6割近くに達した地域もありました。
経済的に困窮する人々の中には、EU圏からの移民が雇用を奪い、賃金低下や財政悪化の原因になっているとの不満が強く、一部離脱派による反移民キャンペーンが浸透しました。しかし、少なくない離脱派の人々は移民を敵視するこうしたキャンペーンには懸念を持っています。日本の記者の取材に対して、離脱に投票したが、そのことで人種差別者と思われることには耐えられない」と答えた人もいます。現地メディアは、経済的恩恵を感じず、置き去りにされていると感じる人が多かったなどと分析しました。
EUからの離脱通告の決定にはイギリス議会の議決が必要ですが、議会の7割は残留派が占めています。国民投票の再実施を求めるオンライン署名は、6月30日時点で400万人を超えたとされています。

府障教定期大会発言ダイジェスト(その6)

成功も失敗も受け止められる職場を!

富田林支援学校分会 竹内代議員

富田林支援学校では今年度も多くの教職員の入れ替わりがありました。特に小学部の



更年期でつらい思いをしながら仕事をしているなど、たくさん声を聞くことができませんでした。特に不妊治療に関しては、他府県においては何らかの形で特休が認められているところが多い中、大阪府は困難と答えるだけで、考えてみよつという姿勢も感じられました。今後強く要望していきます。

3分の1が入れ替わり、初任の方が6人も入って来てくれることになりました。「そう

いった方々の成功も失敗も受け止めるための教職員集団を小学部から作ってほしい」と、そんな話をスタートを切りました。そんな思いの根本は、集団による論議を保障していきたくということです。話の苦手な人も、経験の浅い

人も、それぞれの良さを生かして大いに子どもへの愛を語る職場にしたい」という夢なのかなと思います。そんな中、分会には10人の新規加入があり、初任者も組合に入ってくれました。別に特別な対話をしたわけではありません。4月1日のお迎

えで初任者の方全員と一緒に帰り、女性部の方々が中心になって作ってくれた昼食を食べながら組合の紹介をしました。そして、話が終わったら多くの方が加入書を書いてくれました。組合に入るといふ事については、その考え方は一人ひとりばらつきはあるでしょう。ただ、言えるのは同世代の我々が訴えかけた事が大きかったのかなと思います。今後は、組合の本当の価値をしっかりと伝えていく必要があると考えています。

母性保護は、職場の協力でできるもの

女性部 池側代議員



2013年度・14年度と「育児・育メンアンケート」を実施し、それをもとに対府交渉では、育児のための短時間勤務制度の問題点「保育特休の復活と拡充、家族休暇の復活」「不妊治療にかかる特別休暇の創設」についてやりとりをしました。満足のいく回答ではありませんでしたが、これからも粘り強く訴えていきたいと思えます。また、母性保護アンケートを実施しましたが、未組合員のみなさんからも多くの回答をいただきました。生理休暇が取れていなかったり、不妊治療をされている方が予想より多かったり、

母性保護は、女性だけが気をつけていくことで、できるものではありません。職場のみんなで助け合い、協力し合ってできるものです。昨年度は青年部と一緒に、パパママ子育て応援企画を行いました。今後も育休中の方にも参加してもらって、子育てを応援するとりくみを計画していきたいと考えています。「戦争法案」を廃案にする運動では、わが子はもろろんのこと、教え子を戦争に送らないという固い決意で、女性の

先輩に聞こう! Vol.9

「日の丸・君が代」は、なぜだめなんですか?
匿名 青年教職員 (その2)

「日の丸・君が代」の争点は、歴史的背景、思想・良心の自由、教育権の主体、教育と命令(強制)に大別できると考えます。今回は について述べましたが、今回は について述べます。

教育権とは、「教育への権利」と「教育内容の決定権」を指します。「教育への権利」が第一義的に子どもにあることは論争になりません。しかし、「教育内容の決定権」の主体が「国家」か「国民」かについては論争になります。

教師の仕事は、天皇主権において「訓導は、学校長の命を承け、児童の教育を掌る」でした。戦後、「教諭は、児童の教育をつかさどる」に改められました。ここで重要なのは、主権在民のもと「学校長の命を承け」が削除されたことです。これは、教師に与えられる教育内容の決定権が国(天皇)から承るものではなく、主権者国民から与えられる(付託を受ける)ものへと180度転換されたことを意味します。したがって、教育は「人類普遍的価値と真理・真実」に基づき、教育権は国民(主権者)にあり、その付託を受けて教師は子どもに教育を実施しているのです。

かつて、教育勅語を軸に「国家」が教育内容を決定し、「お国のために死ぬことが美德」との教育が問答無用で進められました。それに対する痛苦の反省から、「国家」による教育介入を戒め、戦後の教育はスタートしました。しかし、「日の丸・君が代」は、その学習内容を子どもの願いや実態から導かず、国が政治的意図を持って教育現場に押しつけています。教育権における「日の丸・君が代」問題は、「国家」による教育介入にあると考えます。教科書検定・採択も、「国家」による教育介入が進められています。「国家」が政治的・政策的に推進する教育が、「人類普遍的価値と真理・真実」に基づくとは限りません。

子ども的人格形成という崇高な職務に向き合う青年教職員のみなさん、この命題にどのように向き合いますか?

(田崎尚弘 藤井寺支援学校分会 30年目)